

2020年10月4日 主日礼拝説教要旨: 召天者記念礼拝

列王記下 13:14~21 「彼は死ぬれども」

高井 卿 介

今朝は召天者記念礼拝でありますので、預言者エリシャの臨終とその死後もなお、働いている彼の生涯について学ぶことに致します。

I. エリシャの臨終(14節)

エリシャは預言者エリヤの弟子として、師のエリヤが「火の馬に引かれた火の戦車に迎えられて嵐の中を天に上って行った」のを見送った後(列王下2:11)、長年の間預言者として神に仕ええて来た。

両者は共に多くの奇跡を行ったが、エリシャの奇跡は人々の生活に密着し、それを助けるものが多かった。

例えば、流産を起こすエリコの水を癒し(王下2:19~22)たり、母子家庭の借金を返済するために、空の器に油を満たし(王下4:1~7)たり、ヨルダン川の中に落ちた鉄の斧の頭を1本の枝を投げ込んで浮かび上がらせ(王下6:1~7)たりなどの奇跡で、その数も師のエリヤの奇跡の数の倍であった。

そのエリシャも「死の病を患って」臨終を迎えた時、ヨアシュ王が見舞いに来て悲しんだ

II. エリシャの死にざま(15~19節)

今まさに死なんとする病人に王が、泣いて「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ」(14節)と叫んだのは、エリシャが如何にイスラエルにとって、大きな存在であったことを表している。

エリシャは「矢を射なさい」(王下13:17)、「五度、六度と射るべき」(王下13:18)と命じた。エリシャは王に戦い続けるように励まし、督励した。

使徒パウロも弟子のテモテに「信仰の戦いを立派に戦い抜き」(I テモテ6:12)と命じている。キリスト者の信仰生活もサタンとの戦いの生涯であることを忘れてはならない。

III. 人を活かすエリシャの骨(20~21節)

さて「エリシャは死んで葬られた」(20節)のですが、墓の中のエリシャは死後何か月も経ち骨となりました。

その頃、隣国モアブの軍隊がイスラエルに略奪のために侵入して来た。丁度その時、葬儀があり、遺体を墓に運ぶ途中、その略奪隊に遭遇した。そこで遺体をどこかに隠そうとして、近くにあった墓に取り敢えず放り込んだ。

何と、それはエリシャの墓であった。そこにはエリシャの骨があり、放り込んだ遺体はそのエリシャの骨に触れた。すると、その遺体は「生き返り、自分の足で立ち上がった」(21節)のであった。これは一体何を意味しているのだろうか。

私たちが既に故人となられた方々の事を思い出し、その故人となられた方々が、かつて語られたことばや、生き方を思い出すとき、私たちは多くの励ましや慰めや知恵を与えられます。その意味で「~は死にましたが、信仰によってまだ語っています」(ヘブル11:4)と言えるのではないのでしょうか。